武蔵野日曜集会

# 無者イエス
## ――ヨハネ伝第5章19～47節――

１９９４年７月10日
小池辰雄

魂之霊（たましひ）　ゼロが無限大になる　自分をキリストの中に投げいれる　キリストの預言　死人をも甦えらせる　「御霊を受けろ」　キリストの自証体になる

【ヨハネ5・19～47】

19 イエス答えて言い給う『まことに誠に汝らに告ぐ、子は父のなし給うことを見て行うほかは自ら何事をも為し得ず、父のなし給うことは子もまた同じく為すなり。20 父は子を愛してその為す所をことごとく子に示したもう。また更に大なる業を示し給わん、汝等をして怪しましめん為なり。21 父の死にし者を起こして活かし給うごとく、子もまた己が欲する者を活かすなり。22 父は誰をも審（さば）き給わず、審判（さばき）をさえみな子に委ね給えり。23 これ凡ての人の父を敬うごとくに子を敬わん為なり。子を敬わぬ者は之を遣（つかわ）し給いし父をも敬わぬなり。24 誠にまことに汝らに告ぐ、わが言をききて我を遣し給いし者を信ずる人は、永遠の生命（いのち）をもち、かつ審判に至らず、死より生命に移れるなり。25 誠にまことに汝らに告ぐ、死にし人、神の子の声をきく時きたらん、今すでに来れり、而して聞く人は活くべし。26 これ父みずから生命を有（も）ち給うごとく、子にも自ら生命を有つことを得させ、27 また人の子たるに因りて審判する権を与え給いしなり。28 汝ら之を怪しむな、墓にある者みな神の子の声をききて出づる時きたらん。29 善をなしし者は生命に甦（よ）えり、悪を行いし者は審判に甦えるべし。

30 我みずから何事をもなし能わず、ただ聞くままに審くなり。わが審きは正し、それは我が意（こころ）を求めずして、我を遣し給いし者の御意（みこころ）を求むるに因る。31 我もし己につきて証（あかし）せば、我が証は真（まこと）ならず。32 我につきて証する者は、他にあり、その我につきて証する証の真なるを我は知る。33 なんじら前に人をヨハネに遣ししに、彼は真につきて証せり。34 我は人よりの証を受くる事をせねど、唯なんじらの救われん為に之を言う。35 かれは燃えて輝く燈火（ともしび）なりしが、汝等その光にありて暫時（しばし）よろこぶ事をせり。36 然れど我にはヨハネの証よりも大（おおい）なる証あり。父の我にあたえ成し遂げしめ給うわざ、即ち我が

おこなう業は、我につきて父の我を遣し給いたるを証し、37また我をおくり給いし父も、我につきて証し給えり。汝らは未だその御声を聞きし事なく、その御形を見し事なし。38その御言は汝らの衷にとどまらず、その遣し給いし者を信ぜぬに因りて知らるるなり。39汝らは聖書に永遠の生命ありと思いて之を査ぶ、されどこの聖書は我につきて証するものなり。40然るに汝ら生命を得んために我に来るを欲せず。41我は人よりの誉をうくる事をせず、42ただ汝らの衷に神を愛する事なきを知る。43我はわが父の名によりて来りしに、汝等われを受けず、もし他の人おのれの名によりて来らば之を受けん。44互に誉をうけて唯一の神よりの誉を求めぬ汝らは、争で信ずることを得んや。45われ父に汝らを訴えんとすと思うな、訴うるもの一人あり、汝らが頼とするモーセなり。46若しモーセを信ぜしならば、我を信ぜしならん、彼は我につきて録したればなり。47されど彼の書を信ぜずば、争で我が言を信ぜんや』

## ●魂之霊

ドイツのビスマルクは、

「私は神の他は何ものも恐れない」

と言った。さすがはビスマルクです。ビスマルクだとか、グラッドストーンだとか、リンカーンだとか、偉大な政治家はみな深い信仰をもっていました。その点で日本の政治家は、いかにそういう宗教的な面が欠けているか。仏道でもキリスト道でもどちらでもいいですが、とにかく宗教的な境地、宗教心をもたないような政治家なんてものは、私は非常に残念に思います。大体、日本の教育者自身が、宗教心のある教育者が一体どれだけいるか。日本は精神的には全く頼みにならない。とにかく我々は、近しい人に、たまたま会う人でもいいですが、キリストの福音を本当に伝えざるを得ない。誰でもが、皆さん一人びとりが伝道者であるということをいよいよ自覚していただきたいと思います。

聖徳太子は仏教をしっかり信じていました。さすがに偉い政治家でした。魂があるということは、魂は宗教界に属しているということです。宗教界に属しているはずの魂が宗教心をもたなかったら、実は魂は本当は生きていない。魂は

「魂之霊」

と書く。霊なんです。霊界に属している。

歴史を動かすものは一人なんです。一人の人間が歴史を動かす。偉大な政治家はみな深い信仰をもっていた。神さまとの交わりをもっていた。そういう意味で、日本の教育者自身が宗教心をもたなかったら、本当は教育してはいかんと言ってもいいくらいです。仏道でもキリスト道でも本当の宗教の世界は、キリスト道、仏道と言いながら、ちゃんと本も

のを尊重していく心をもっています。

「お前は仏教だが、キリスト教に変われ」

なんてことは言わない。

「仏道でもキリスト道でも、とにかく本ものであれ」

ということが大事なことです。ゲーテが、

「本当の業(わざ)は宗教心がなければできない」

と言っている。さすがはゲーテです。それだけのことを言える文人が日本にいるかというんだ。そういうわけで、テレビを見ても、新聞を読んでも、ガッカリすることばっかりです。

## ●ゼロが無限大になる

今日は『無者イエス』という題でお話します。私はキリストのことを「無者」と言っている。キリストは神の他は何ものもない。自分を何ものともしない。神さまだけを問題にしている。

19 **イエス答えて言い給う『まことに誠に汝らに告ぐ、子は父のなし給うことを見て行うほかは自ら何事をも為し得ず、**

何もできないと。キリストは、

「自分では何もできない。自分ができるのはみな上から力がくるんだ、上から言葉がくるんだ」

と言う。キリストは神一切です。神を

「父よ」

と呼んだ。「父―子」という「神―イエス」の関係は本質的な関係です。本質関係、質的なことです。神はもちろん髭のはえたお爺さんではない。「父」という言葉は暗号ですから。ただ、人格的な気持があるけれども、ここでは本当は霊的人格なんです、霊的存在です。別に母というものは考えない。この父という言葉は、いわゆる父母の父とはちょっと違う。仕方がないから、そういう表現をしているだけの話です。霊的な実在者です。それによって自分は天から下ってきたんだと。キリストは降臨したのですから。もともと霊界に居たのだけれども、肉をとって肉体となって現れた。ヨハネ伝に書いてあるとおりです。

19 **『まことに誠に汝らに告ぐ、子は父のなし給うことを見て行うほかは自ら何事をも為し得ず、父のなし給うことは子もまた同じく為すなり。**

「自分では何もできない。父のなし給うことは子もまた同じくさせられているんだ」

と。「為すなり」とはほとんど受け身です。「同じく」というのはギリシア語では「ホモイオース」という字で、質的に同じくということです。

20 **父は子を愛してその為す所をことごとく子に示したもう。**

「示したもう」は本当は「示したまえばなり」なんだ。

**また更に大なる業(わざ)を示し給わん、汝等をして怪しましめん為なり。**

「何もできない」と言っている人が「何でもやる」というわけです、上から力がきてね。だから、私はキリストのことを「無者」という。何もできない、自分は何もない。ところが、無者は無限無量者なんです。上からくるから、この無が無限無量になる。

だいたい「無」という字は「天蓋の下の四十の林」なんです。大空の下の四十の林の木の数は数えられるか。だから、無は無数を表している。無即無限無量ということ。何も無いというと、実は上からいろいろなものが満ちてくる。この部屋には本当は光がない――蛍光灯なんてものは問題でない――光の無い所に太陽の光が入ってくる。素晴らしい光が入ってくる。そうすると、光の無い所に、今度は、この部屋は太陽の光で本当に明るい部屋になってしまう。そういうわけです。だから、自分はゼロでいい。ゼロが無限大になる。

「0＝∞」（ゼロ＝無限大）

ということです。

## ●自分をキリストの中に投げいれる

よく、「信仰、信仰」と言う、「私の信仰は…」とか。私は、

「信仰なんか何もありません」

と言う。自分の信仰なんかを問題にしていたら、いつまでたっても始まらない。

「まだ私の信仰は薄くて……」

なんて言うが、薄いも厚いもありはしない。キリストがちょっとそんなことを仰ったから、キリストの言葉に躓かないように。

**「信仰薄きものよ」**

と。「それでは、厚くなりましょう」なんて思う。

「私には信仰はありません。ただあなたがあるだけです」

と、これでいい。それでもう、全部自分をキリストの中に投げいれる。キリストは神さまの中に自分を投げ入れている。だから、投身ということ、全身を投げ入れることが大事です。

「信ずる」なんていうのではない。信ずるはダメだ、

「私は信じています」

なんてのは。

「まだ少し聖書の読み方が足りないから、もう少し読まないと信仰が進みません」

なんていう、そんな相対的な判断はひとつも要らない。投身する。そうすると、グーッとキリストの力がくるから。信じ仰いでいるのではない。そういう気合が非常に大事なんです。そうすると楽でしょうがなくて、力が来て、光が来てしょうがない。絶対に行き詰まらない。

だから、私は無ということを言うんです。無者ということ。キリストは神さまに対して無者であった。だから、無限無量者になってしまった。

**「我を見し者は父を見しなり」**

ということになった。

「**自分は何もできない**」

というひとが、「我を見し者は父を見しなり」という。簡単で楽で力が来てしょうがないという、そういう止むに止まれざる世界です。それを私は天的必然と言う。

「こうしようか、ああしようか」

ではない。必然だから。天的必然の力で動いていく。

昔から、私は「信仰、信仰」という言葉を散々聞かされた。

「信仰のみ。業は問題でない」

なんて。ところが、実は本当の信仰は最もはげしい業なんです、自分を投げ込むのだから。自分を投げ込むのは一番すごい業、行、行為なんです、全身的行為なんです。

ゲーテはヨハネ伝の最初のところを、

「初めに行為あり」

と訳した。

「言葉ではなく行為だ。行為に裏付けられない言葉なんていうものは空しい」

と。何か行為してから、ものを言う。ものを言ってから、行為するのではない。こういうのが本当の行の世界です。禅宗の悟りも何も要らん。これが本当の悟りの世界なんです。

あなた方はお聞きになりながら、力が来ましたか。私は語りながら、上から力が来ている。語るも聞くも同じこと。そういうのが福びの音信、福音なんだ。

キリストは、

「**私は何もできない**」

という人が一番凄いことをやっている。ヨハネ伝5章30節にちゃんと書いてある。

**30 我みずから何事をもなし能わず、ただ聞くままに審くなり。わが審きは正し、**
**それは我が意を求めずして、我を遣し給いし者の御意を求むるに因る。**

御意に、上からの力に圧倒されて生きている。

## ●キリストの預言

イザヤ書11章1節に、

**「1 エッサイの株より一つの芽いでその根より一つの枝はえて実をむすばん。**
**2 その上にエホバの霊とどまらん……」（イザヤ11・1～2）**

とある。「エッサイ」とはダビデのお父さんのこと。これはキリストの預言です。

**「旧約は自分のことを預言している」**

とキリストは仰った。キリストの預言は方々にある。一番凄いのはイザヤ書53章です。こんな鮮やかなキリストの預言はない。イエス・キリストはその通りのひとです。

**「1 われらが宣るところを信ぜしものは誰ぞや、エホバの手はたれにあらわれ**

しや。2かれは主のまえに芽えのごとく、燥きたる土よりいづる樹株のごとくそだちたり。われらが見るべきうるわしき容なく、うつくしき貌はなく、われらがしたうべき艶色なし。3かれは侮られて人にすてられ、悲哀の人にして病患をしれり。また面をおおいて避ることをせらるる者のごとく侮られたり。われらも彼をとうとまざりき。

4まことに彼はわれらの病患をおい、我等のかなしみを担えり。然るにわれら思えらく彼はせめられ神にうたれ苦しめらるるなりと。5彼はわれらの愆のために傷けられ、われらの不義のために砕かれ、みずから懲罰をうけてわれらに平安をあとう。そのうたれし痍によりてわれらは癒されたり。

これは凄い言葉だね。

6われらはみな羊のごとく迷いておのおの己が道にむかいゆけり。然るにエホバはわれら凡てのものの不義をかれのうえに置きたまえり。」（イザヤ53・1～6）

全部、罪はイエス・キリストが背負ってしまったという。イザヤ書53章は全部、イエス・キリストの預言です。だから、キリストはこういう旧約をお読みになって、

「聖書は我につきて証するなり」

と言われたのはそのことなんです、

「私のことをちゃんともう証している、預言している」

と。「聖書」という言葉はその頃はない。「律法と預言者」という言い方をした。

## ●死人をも甦えらせる

「自分では何もできないが、父の為したもうことは子もまた同じくさせられている」という。

20父は子を愛してその為す所をことごとく子に示したもう。また更に大なる業を示し給わん、汝等をして怪しましめん為なり。

「死人をも甦えらせる」と書いてあるね。

21父の死にし者を起こして活かし給うごとく、子もまた己が欲する者を活かすなり。

死者を甦えらせたね。

22父は誰をも審き給わず、審判をさえみな子に委ね給えり。23これ凡ての人の父を敬うごとくに子を敬わん為なり。子を敬わぬ者は之を遣し給いし父をも敬わぬなり。

こういうような表現は、キリスト自身の言葉ではなくて、作者ヨハネがキリストの言葉として書いているわけです。

24 **誠にまことに汝らに告ぐ、わが言をききて我を遣し給いし者を信ずる人は、永遠の生命をもち、かつ審判に至らず、死より生命に移れるなり。**

凄いね。

「**我を遣し給いし者を信ずる人は**」

の「信ずる」という言葉が躓きになる。全存在で受けとる、体受するということです。

「我れ汝のうちに、汝わがうちに」

という関係です。キリストに贖われている我々は平伏して、その中に入っていく。遠慮することはない。キリストは、

「**我を見し者は父を見しなり**」

と仰ったから、今度は、あなた方一人びとりが、

「我を見し者はキリストを見しなり」

と言って構わないわけです。

「私の中のキリストが見えないか」

と。それが本当の現実ですから。それでなかったら、それだけの生命をいただいていなかったら、つまらんですよな。だから、「信仰」という言葉が非常に二段構えになってしまう、観念になってしまう。

「身体で受けとる」

のが一番いい。

「私はキリストを生きています。キリストに生かされて生きています」

と言わなくては。キリストは父を生きていた。神さまを生きていた。だから、キリストはもの凄い。何でもできてしまう。何もできないひとが何でもやる。

「**起きよ！**」

と言えば、死人が起きてくる。ああいうのは凄い。死人には聞く耳がないはずです。聞く耳がないはずなのに、「起きよ！」と言うのだから。そうするとその響きが、死んだような魂に響いて、これを甦えらせてしまう。聞かしめてしまう。あの霊言というのは凄いものだ、普通の言葉とは違うんだ、力をもっている。

私はあなた方にお説教なんかしていません、告白している。自分の現実を告白している。あなた方も現実をもって告白的に受けとっていく。だから、集会が終わると、もう全身が力に満ちている。集会が終わってから、

「お疲れさま」

なんて時々言うが、冗談じゃない。話をした後で疲れるのは、それは観念的な信仰の先生方です、いわゆるお説教しているから。我々の集会は、語るも聞くも同じこと、そのような上からの力をいただいているんだから。帰りは、来る時よりももっと足がどんどん楽に動く。キリストの生命というのはそういうものです。

●「御霊を受けろ」

いかなるイズムも福音を限定することはできない。イズムが福音に限定されるなら分かるけれども、福音を限定してたまるか。福音というのは無限無量な世界だから。ゲーテもこの「デフィニーレン（限定する）」ということが嫌いだった。大自然のごとく無限無量である。また、特定の時ではなく、過去も現在も未来も全部、掌握するところの永遠の今ということ。現在というところに永遠性がなければダメなんです。

世界は、本当に政治家が神を畏れるようになれば、もはや、どこの国がどうだこうだなんてことでなくなる。イザヤ書19章24節に有名な言葉がある。

「24**その日イスラエルはエジプトとアッシリヤとを共にし三つあいならび地のうえにて福祉をうくる者となるべし。**

イスラエルとエジプトとアッシリヤですから、これはみな対立しているような信仰の世界なんだ。「その日」というのは、本当に神の救いを受けとれば、そうすればその日イスラエルとエジプトとアッシリヤも、日本もロシアも朝鮮もというようなわけだ。

**三つあいならび地のうえにて福祉をうくる者となるべし。25万軍のエホバこれを祝して言いたまわく、わが民なるエジプトわが手の工なるアッシリヤわが産業なるイスラエルは福いなるかな。**」（イザヤ19・24～25）

イザヤは、そういう相容れないようなものも本当は神さまに魂を向ければ、みな一つになってしまう、と預言している。

24**誠にまことに汝らに告ぐ、わが言をききて我を遣し給いし者を信ずる人は、永遠の生命をもち、かつ審判に至らず、死より生命に移れるなり。**

キリストは非常に簡単にこういうことを言われる。キリストの言葉は非常に圧縮された言葉ですから。

**「我を遣し給いし者を信ずる人」**

とは、身体で受けとる人ということです。キリストの業、キリストの言葉は全部、霊的な力をもっているから、こういうことが言えるわけです。福音書のキリストの言葉、業を端的に受けとっていく。そうすると、もう死から生命に移ってしまう。審判なんか問題でない。

無教会は、

「十字架、十字架」

と言いながら、その後に「聖霊」のことは一つも言わない。しょっちゅう「十字架」ばかり言っている。キリストは十字架で贖罪をした後では、

**「祈って待っていろ、お前たちに聖霊が与えられるぞ」**

と、ちゃんとそう言っておられる。十字架の土台のもとに必ず聖霊はやってくる。この十字架の土台を忘れてはいかん。十字架と聖霊は離すわけにはいかない。贖罪した後では必ず聖霊をもって「永遠の生命」をくださっている。

「御霊を受けろ」

と。

## ●キリストの自証体になる

「御霊無きものは空しい」

とパウロがローマ書8章で言っているでしょ。パウロの書翰というのは凄い。ローマ書8・1～11は大事な所です。

「1この故に今やキリスト・イエスに在る者は

キリスト・イエスと一つになっている者は、

罪に定めらるることなし。2キリスト・イエスに在る生命の御霊の法は、なんじを罪と死との法より解放したればなり。3肉により弱くなれる律法の成し能わぬ所を神は成し給えり、即ち己の子を罪ある肉の形にて罪のために遣し、肉に於て罪を定めたまえり。4これ肉に従わず、霊に従いて歩む我らの中に律法の義の完うせられん為なり。5肉にしたがう者は肉の事をおもい、霊にしたがう者は霊の事をおもう。6肉の念は死なり。霊の念は生命なり、平安なり。7肉の念は神に逆う、それは神の律法に服わず、否したがうこと能わず、8また肉に居る者は神を悦ばすこと能わざるなり。9然れど神の御霊なんじらの中に宿り給わば、汝らは肉に居らで霊に居る。キリストの御霊なき者はキリストに属する者にあらず。

これです。

「キリストの御霊なき者はキリストに属する者にあらず」

と、9節に書いてある。

「十字架、十字架ではダメだ。御霊だ」

というわけです。

10若しキリスト汝らに在さば体は罪によりて死にたる者なれど霊は義によりて生命に在らん。11若しイエスを死人の中より甦えらせ給いし者の御霊なんじらの中に宿り給わば、キリスト・イエスを死人の中より甦えらせ給いし者は、汝らの中に宿りたもう御霊によりて汝らの死ぬべき体をも活かし給わん。」（ローマ8・1～11）

パウロが言っているとおりです。それはもう聖霊はありがたい。聖霊の中身は凄いですから。聖霊はいろいろなものをもっている。御霊の力であなた方がなさることは全部、御霊の力で動いていく。だから、くたびれない。

「お疲れさま」

なんて、疲れませんから。それは夜になれば、眠くはなるさ。私は時々夜中に、夢か現か

分からないような、それくらいにはっきりしたことがあるね。あまり良いことだか悪いことだか知りませんけれども。

**25誠にまことに汝らに告ぐ、死にし人、神の子の声をきく時きたらん、今すでに来れり、而して聞く人は活くべし。26これ父みずから生命を有ち給うごとく、子にも自ら生命を有つことを得させ、27また人の子たるに因りて審判する権を与え給いしなり。28汝ら之を怪しむな、墓にある者みな神の子の声をききて出づる時きたらん。29善をなしし者は生命に甦えり、悪を行いし者は審判に甦えるべし。**

**30我みずから何事をもなし能わず、ただ聞くままに審くなり。わが審きは正し、それは我が意を求めずして、我を遣し給いし者の御意を求むるに因る。**

全くキリストは神さまの言いなりどうりに動いていたというわけです。神さまの自証体です。自ら証している。我々はキリストの自証体にならなくてはね。何も立派である必要はない。我々は躓いたり転んだりのしょうがない者だ。けれども、その破れ器の中に金剛石のような光がある。これはキリストの光です。それを証していく。

「この世の破れ器を神さまは、キリストはお使いになるんだ」

と、あなた方一人びとりがはっきりと言えるわけです。人の相対的な判断なんかはどうでもいい。

身証する。身をもって証する。こんな言葉はないけれども、現証する、現在、現に現証する。そういう我々の毎日の生命です。

皆さん、聖書をお読みになるときに、聖書の現実の中に自分を入れなかったら、つまらないですよ。自分がヨハネとなり、パウロとなり、ペテロとなる。そして、キリストの

「…すべし。…すべからず」

なんていう言葉は、

「必ずできる。そんなことはしない」

というように、もうひとつキリストの言葉の奥を読んでいった方がいい。律法のように読んだらダメです。そういうず太い読み方をしないとね。福音書を読んで、なにしろ、

「光がきてしょうがない、生命がきてしょうがない」

と、そういう読み方をしないとね。現実の中に自分を投げ入れて読む。これは文字ではない。現実です。だから、ナポレオンがセントヘレナに流されて、福音書を読んだときに、彼は初めて本当に読めた。

「これは文字ではなかった。生きものだった」

と、彼は驚いたという。そして、キリストの前に降参した。最後にナポレオンは救われた。